

せっかち 園長の ひといごと

2015、11、30

認定こども園あかみ幼稚園・メイブルキッズ 統括園長 中山昌樹

いよいよ明日から12月、師走ですね。先日は佐野や足利の神社で、えびす（恵比寿）講がありました。縁起物の熊手などが売られるお祭りです。子どものころは、えびす講が「えびすこ」と聞こえて、ナビスコみたいなものかと思っていました。そしていつもとっても寒い時期に行われていた記憶がありますが、今どきは温かくはないけれど寒くはない「えびすこ」。これも、温暖化の影響なののでしょうか？・・・風邪や感染症が増えてきました。手洗い・うがいを基本に、やはり『病気に負けない身体』作り、ですね。

今回の初めの話題は・・・

下は、Facebookで見かけた記事です。書いた方が広めていいという意思表示をされているので、全文を紹介します。

書いた人・・・須藤 暁子さん。医師、読者モデル、コラムニスト。Spotlight プラチナ公式ライター。大学病院に勤務する二児の母。総合格闘技、プロレス興行でリング
ドクターを務める。 <http://ameblo.jp/akko-1005/> 『ある女医さんの子育て親育て～Dr.須藤暁子の読むおくすり』。



私には二人の息子がいます。長男(太郎)は3歳半、次男(次郎)は1歳です。最近長男が、『ごはん食べたくない！！たろう、おかし食べる！』と、ろくに食事をしないで間食ばかりしてしまうのです。その日もいつものように私と長男、次男の3人で夕食をとっていました。手がかかる次男の近くに私が座って、困惑しながらも手づかみ食べを見守っています。

すると、玄関のドアが開き、パパ(主人)が帰ってきました。平日の子供たちの食事の時間に帰れることはとても珍しいので、子供たちは大はしゃぎでした。しばらくして、ごはんをまだ全体の2割も食べていないうちに、いつものように長男が『もうおなかいっぱいーい！アイスにしよう！』と言いました。私は、こう言われることに慣れてしまっていたのと、次男がまき散らかすお米や汁物の処理に気を取られていて、この発言をあまり深く受け止めてあげられませんでした。

そこで主人がゆっくりと立ち上がり、ソファへ移動してから長男を呼びました。『太郎、パパの膝に座って。少し話そう。』アイスを食べたくて仕方ない長男は、アイスを取って行こうとしたのですが、主人はそれをさせませんでした。長男はいまアイスを食べさせてもらえないことに癪癪をおこし怒って泣いて、主人の膝に乗るまで時間がかかりましたが、やがて長男と主人は向かい合って目を見て話し始めました。

続く↓

私はといえば（ごはんを食べないのを怒ってくれるのかな）と、内心にやにや。パパ『太郎、よくママにプレゼント作ってあげるよね？』太郎『うん、今日もね、お花とって、かみでつつんで、あげたの』パパ『ママ、なんて言った？』太郎『ママ、うれしいっていった。そこにかざってあるよ！』と一輪ざしを指さして。パパ『じゃあね、ママが、太郎のプレゼントなんかいらない、こんなお花じゃなくて他のがいいって言ったらどんな気持ち？』太郎『・・・(ショックを受けて)いやだあ』口がへの字に曲がって、まぶたから顔全体が真っ赤になって涙が溢れてきました。もともとご機嫌ナナメなことも要因ですが、この会話だけで本気で傷つき、ショックを受ける子供の想像力はすごい。

パパ『ママが毎日作ってくれるご飯はね、お前へのプレゼントなんだよ。太郎が喜んでくれると思って、嬉しい気持ちで作ってるんだ。それは、お前がママのためにお花をつんでいるときの気持ちと同じだね。』太郎『うん。。(泣いている)』パパ『ママはね、お前のために一生懸命作ったプレゼントを、いらないって言われて毎日自分で捨ててるんだよ。どんな気持ちかな。』太郎は大きな声で泣きました。ごめんなさいママ～と言いながら、泣きました。主人の言葉、向かい合う姿勢、プレゼントという言葉。全てが、長男に染み込んでいくのがわかりました。

しかし長男は泣きながらこうも言いました。『ママといっしょにたべたかったんだもんー、あちゅまれしてほしいんだもんー』今度はこれが私に刺さりました。正直、毎日の食事では次男にばかり気を取られていました。ごはんをこぼすしまき散らすからといって、自分はほとんど座らず片付けてばかり、ゆっくり食べることもなかった。『お兄ちゃんは自分で食べられるから偉いね』という本意は『1人でしっかり食べてね』だったのかもしれない。次男も一緒に食事をするようになってから、そういえば長男は『あちゅまれして』と言わなくなった。『あつまれ』とは、お皿に散在しているご飯をスプーンでかき集めること。昔はよく言ってたけど、成長したんだなあなんて勝手に思っていました。

でも違った。ママこそ本当にごめんなさい。ごはんを食べなくなってしまったのには、とても大きな理由があったんだね。どんなに凝ったご飯より、ママがきみを想って、ちゃんと一緒に食べることが一番のプレゼントになるんだね。長男は『あつまれ』をしてほしかったんだ。3人でのいるのに、ひとりぼっちを感じていたんだ。と気付けたのです。

それから私は長男とのご飯が楽しみになりました。『ママのぷれじえんとぜーんぶピカリン(残さずキレイに食べること)しちゃうもんね～』とはりきってくれています。普段はほとんど家にいない主人ですが、彼もこうして大きなプレゼントをくれます。家族のことをよく見てくれている、それが本当にありがたいし、一番効果的な育児をしてくれていると思います。おむつを替えるよりミルクをつくるより、ずっとね。



いかがですか？ きれいすぎる話だと思いましたか？ 我が家では誰が子どもとこんな会話をするのだろうと思いましたか？

我が家のパパとこの話のパパを比べたりしなかったですか？・・・いろいろな受け止めがあっていいと思いますが、私がここでこの記事を紹介したのは、前回の「ひとりごと」でお伝えした、**意味のある我慢（あるいは理由のある我慢）**ということと、**幼い子どもの声なき声をいかに聴くか**、ということを経験したからです。

ここで紹介したようなやり取りは、なにもパパだけではなくママがしてもいいはず。さらに言うと、私は、近くにいるどの大人も、子どもとこのような関わりをしてほしいと思うのです。私たちの職場には次のような心得があります。

「どんなに小さい子どもでも ひとりひとりに 人としての尊厳がある！

→相手（子ども）を大切にし 保育者の思い・気持ちが 伝わる 伝え方を工夫しよう」

小さいから、我が子だから、親の言うことをきかなくてはならない、と考えますか？ そして思うようにならないと、ほめたり叱ったりして言うことをきかせますか（あめとむち）？

最新の発達心理学などの研究が明らかにしているのは、子どもは小さくても、大人が思うよりはるかに有能なのだ、ということ。小さい子どもに合った（発達に合った）伝え方をすれば、ちゃんと伝わるし、上のエピソードにもあるように、（ママと一緒に食べたいという）自分の考えや気持ちを伝えることもできるのです。初めは言葉で言えないかもしれませんが。それはただ泣いたり、わざと大人が困ることをするような姿かもしれません。そこでは、声なき声を**聴く**・・・そういった大人の姿勢が重要です。（「聞く」ではなく・・・「**聴く**」は、14の心と耳を使う関わり方です。日本語（漢字）って、すごいですね！）

次の話題は、お薬について（の新しい話）・・・

さてすでにご案内させていただきましたが、12月5日（土）の保護者会理事会後に、投薬についてのミーティングが開かれます。そこでは、これもすでにお伝え済みですが、職員が、より子どもや保育に専念するために、日中の処方量を減らすなどの対応ができるかどうか検討しよう、というのが主旨です。

・・・ここではまず、その後、佐野市幼稚園連合会（12の園で組織されている）で話し合われた



効かなくなる抗生物質

ジュネーブ支局長
石黒 稔

20世紀の発見以来、結核、赤痢、チフスなど感染症の脅威から人類を救った抗生物質。それがまったく効かない時代が到来する――。

世界保健機関（WHO）

がこう警告している。

抗生物質に免疫を備える耐性菌が増えているためだ。喉の軽い炎症くらいでも治療できずに命を落とす。そんな状況になりかねないという。

突然変異で生じる耐性菌は、抗生物質の乱用が原因で増殖する。集団院内感染

を引き起こすなど、日本でも問題となってきた。危機感が一気に高まったのは5年ほど前。インドで、既存のどんな薬も効かない「スーパー耐性菌」が出現したためだ。細菌に国境はない。この耐性菌も欧米や日本で検出されている。

「抗生物質は必要なきだけ処方し、やみくもに使わない。耐性菌を抑える基本だ」。WHOの耐性菌対策責任者マーク・スプレング博士は語る。

WHO総会で今年5月、「耐性菌対策の行動計画」が採択されたのは、この基

本を徹底させるためだ。各

国で、抗生物質の過度の利

用を戒める啓発に力を入

れ、「規制」を導入する必

要性も明記した。

行動計画に拘束力はな

く、世界で足並みをそろえ

るのは容易でない。最近出

張したコロナでそれを痛感

した。

ほのりっほい屋外で取材

していたら喉が痛くなっ

た。喉あめを買おうと薬局

に入ると、「肺炎になると

いけない」と、箱入りの錠

剤を差し出された。ペニシ

リン系抗生物質という。

「医者に行っても同じ薬

を処方される」とたまたま

比べて利が薄く、数百億円

かかる開発費に二の足を踏

む。

た時代へ逆戻りは避けられ

ないのか。切り札はある。

新しい抗生物質の開発だ。

ところが世界の製薬会社

は近年、抗生物質の研究開

発から次々と撤退。新規発

見は30年前から実質的に止

まっている。慢性病の薬に

う。世界の健康がかかって

いる。急がなくてはならな

い。

かかると

い。

い。

ことをお伝えします。

先日、佐野市幼稚園連合会で職員向けの研修があり、そこでの講師が、「最近では一日2回（3回ではなく）の処方が当たり前になってきている」「そのことを医師たちに訴えてもいいのではないか」という内容の話をしました。本当にこのこと（一日2回処方）が実現すれば、私が願っている『職員が、より子どもや保育に専念する』ことが可能になりそうです。

そこで私が講師に、「お医者さんに処方を2回にしてくれと言いくい

のでは?」「言ったら怒られそう・・・」と質問したら、「ならば団体で、例えば、佐野市子ども・子育て会議で話題にしたら」という回答。私はそれなら、幼稚園連合会で医師会にお願い文を出したらいいのではないかと考えました。そしてその後、園長会（月に1回ある）でそのことを提案しました。12月の園長会でその賛否が問われますが、合意が得られれば、団体として医師会に「お願い」というソフトな関わりができそうです。

次に、薬について別の視点ですが、ちょっと怖いことになっています。

右は、11/8の読書新聞。

①私がこの記事に賛成なのは、抗生物質の使い方を反省すべきということ。

「スーパー耐性菌」が怖いからです。風邪は細菌ではなくウイルスによるものなので、効かない抗生物質を飲むのは、やめるべき。

②しかし、この記事に賛成できないのは「新しい抗生物質の開発」です。

先日テレビである専門家が言っていました。「新薬に頼ると、また繰り返し（いたちごっこ）になるだけ」・・・私もそう思うのです。私は

やはり、『病気に負けない身体』（免疫力）を強くするべきだと思います・・・皆さんは、いかがお考えですか？